

## 「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
98-002	シンガポール「多人種主義」に関する比較社会学研究		
	シンガポール	シンガポール国立大学	1999.7 ~
	鍋倉 聡	京都大学大学院	院生博士

### 研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

本研究のテーマは、シンガポールの「多人種主義 (Multiracialism)」に対して、シンガポールに住む人々が日常生活の中でどのように関わっているのか、明らかにすることである。シンガポールの「多人種主義」をテーマに選んだのは、多文化主義及びエスニシティに関する議論をさらに展開していく上でのポイントが含まれているからである。

マイノリティのエスニシティを政府が公認し保護すべきだとする考えに基づいた多文化主義は、脚光を浴びた時期がかってあった。しかし、1990年代以降、その否定的な側面が、主に欧米の研究者によって指摘されるようになった。エスニシティが固定される問題、多様性を認めるという大義名分の下、政府や国家の力が強まる問題である。アメリカなどでは、実際に多文化主義政策を見直す動きがある。多文化主義は、現在曲がり角を迎えている。

しかし、こうした中で、今なお国を挙げて多文化主義を実行しているところがある。シンガポールの「多人種主義」である。シンガポールの「多人種主義」とは、「華人」「マレー人」「インド人」「その他」という四「人種」がシンガポールを構成するとし、住民全員を必ずどれか一つに分類するとともに、各「人種」を平等に扱うべきだとするイデオロギーのことである。シンガポールでは、現在、「多人種主義」に基づいた積極的なエスニック政策が、幅広く行われている。「多人種主義」とは、各「人種」を政府との関係の下で編成し固定化する試みである。エスニシティやエスニック文化に対する政府側からの積極的な働きかけという点で、多文化主義と共通の問題を抱えており、さらにそれを明確にしている。シンガポールの「多人種主義」は、多文化主義の行きつく先の一つの姿と捉えることができる。

シンガポールの「多人種主義」に対しては、多文化主義に対するのと同様の批判を行うことができる。例えば、シンガポールの「華人」は、福建人、潮州人、広東人などから成るにも関わらず、「多人種主義」によって、「華人」に画一化されてしまうという批判、すなわち、「多人種主義」によって各「人種」が固定されるという先に述べたような批判である。しかし、この程度の批判を行うだけなら、多文化主義に関する議論を演繹すれば足りるのであって、わざわざシンガポールに行き研究する必要はない。

申請者は、欧米中心の従来の多文化主義の議論から一旦離れて得、シンガポール「多人種主義」の現実の姿に注目する。「多人種主義」を、シンガポール住民との関わりの中で検討し直すことによって、従来の多文化主義研究とは違ったアジアからの視点で研究を進める。

シンガポール「多人種主義」の比較社会学的研究——団地再開発を事例として

京都大学大学院文学研究科社会学専修博士後期課程  
98-002 鍋倉 聡  
nabe@socio.kyoto-u.ac.jp

0. はじめに

シンガポールでは、住民のアイデンティティや文化を全て CMIO (Chinese/Malay/ Indian/Others) 別に分けた上で、CMIO 別の多様性を強調する、「多人種主義 (Multiracialism)」と呼ばれる多文化主義政策が行われている。国家がこれほど直接的に介入することを通して多文化主義政策を行っているのは、シンガポールのほかにはない。21 世紀の社会政策の基本となりつつある「多文化主義」を、実践的、理論的に検討することは重要な社会学的テーマだと言えよう。

私は、松下国際財団より助成を得て、1999 年 7 月より 2 年間シンガポール国立大学に留学する機会を得た。大学に通う一方、資料収集及びフィールドワークを行い、「多人種主義」について多面的検討を試みた。本稿では、団地再開発を事例にその成果の一部を報告する。

1. 多人種主義

「シンガポールは、国民の 77%が華人、14%がマレー人、7%がインド人、残る 1.4%がその他から成る多人種社会で…」というように、「人種」という語を用いて、人種の多様性を強調してよく説明される。

このように人種別の多様性が強調されている一方で、ここで注意しなければならないのが、かつてジョフリー＝ベンジャミンが指摘した\*ように、シンガポールに関する全ての人種を持つことを強制されることだ。シンガポールの市民及び永久居住者が携帯を義務付けられている身分証には「Race」欄があるほか、学校では各人種に対応した「母語」(華語(中国語)、マレー語、タミル語)が、第二言語として学習が事実上義務付けられている。例えば、実際の母語が華語でなくても、華人とされれば、華語を第二言語として学び、そこで高得点をあげなければシンガポールで必要不可欠な「学歴」が得られない。そのほかにも、後述するように、団地の購入や売却の際にも、人種が大きく関わってくる。シンガポールでは、人種が私生活の細部にまで影響を及ぼし続けるのである。誰もそれから逃れることはできない。こうした、人種を用いて多様性を演出するとともにそれを管理の手段とする政策諸々の総体は、「多人種主義」と呼ばれている。多人種主義は、1970 年代末頃より政策に色濃く反映されるようになり、現在に至っている。

シンガポール研究の多くも多人種主義の下にあると言え、ほとんどが CMIO 別に分かれた多人種主義内の研究で、多人種主義そのものを検討する研究はあまりない。私は、団地という人種的に「中立」な居住空間に注目し、中でも団地再開発を事例に多人種主義を検討した。

---

\* Benjamin, Geoffrey, 1976, "The Cultural Logic of Singapore's Multiracialism", in Hassan, Riaz(ed), *Singapore. Society in Transition*, Kuala Lumpur: Oxford University Press

## 2. 団地開発と団地再開発

### 2.1 団地開発と団地再開発の違い

シンガポールは、国民の86%が団地に居住する団地国家である。

シンガポールの団地は、植民地時代の1932年に、SIT（シンガポール改良信託）が初めて住宅を建設をして以来、70年近い歴史がある。1960年にHDB（住宅開発庁）が設立されて以降は、HDBによって団地建設が強力に進められた。

1959年度には全人口の8.8%だった団地居住率は、1986年度に約10倍の86%に達し、それ以降ほぼ横ばいのまま現在に至っている。

団地を新たに建設する団地開発の過程は、「団地化」の過程と言える。1986年に86%を達成するまでの「団地化」の過程については、これまでいくらか研究がなされてきた。

しかし、ここで注目しなければならないのは、「86%」という総団地化とも言える数字を達成してから既に15年も経つことである。この15年間、HDBは、団地を新たに建設する団地開発だけでなく、いったんでき上がった団地をつくりかえる団地再開発をも行うことによって、総団地化を達成した後も役割を拡大してきたのだ。

団地開発と再開発は、明確に区別する必要がある。すなわち、

- ・ 団地開発——新しく団地を開発すること
- ・ 団地再開発——いったんでき上がった団地をつくりかえること

である。

団地再開発は現在、最大の焦点になっているにもかかわらず、シンガポールでも研究がほとんど行われていないに等しい。こうした状況の中、私は団地再開発研究を試みることで、多人種主義を検討した。

### 2.2 団地再開発について

シンガポールの団地再開発は、賃貸か分譲かという団地の形態による分け方と、アップグレードか取り壊しかという再開発のやり方による分け方によって、次のように2×2の4つに分類できる。

	アップグレード	取り壊し
賃貸	(賃貸団地のアップグレード)	賃貸団地の取り壊し
分譲	分譲団地のアップグレード	分譲団地の取り壊し

団地再開発は、「団地化」をほぼ達成した1986年以降本格化した。まず対象となったのが賃貸団地で、賃貸団地を取り壊して住民に分譲団地を購入させるなどした。この過程は、「分譲化」と言える。

「分譲化」の過程は、統計を見れば明らかで、1985年度には13万あまりあった賃貸フラットが、1991年度には7万あまりへと半数に近くまで激減したのである。

「分譲化」の完成によって再開発する対象となる賃貸団地が必要最小限度にまで減少した1992年度以降は、分譲団地が再開発の対象となった。その1992年に本格的に始まった分譲団地のアップグレードプログラムでは、「団地化」「分譲化」を経た分譲団地居住者に政府は配慮し、最終決定段階として住民投票制度を設けるなどした。これに対して、1995年開始の分譲団地取り壊しスキーム(Sers)では、住民投票は行われず強制収用の下に行われている。これは、分譲団地居住者を、「団地化」「分譲化」以前の住民と同様、再びたえず移転可能な状況におくプログラムだと言える。こうして、シンガポール住民は永久に移転の対象とされ続ける。

分譲団地のアップグレードプログラムは、各フラット内部のアップグレードまで含む MUP と、外側のみのアップグレードの IUP に分かれる。このうち、MUP は、2000 年度末までに、84 地区 89,738 戸が指定され、IUP は、142 地区 119,370 戸が指定された (HDB2000: 42-43)。  
分譲団地取り壊しスキームの Sers は、2001 年 4 月末までに、45 地区 17,611 戸が Sers に指定されている。

### 3. 団地再開発と「多人種主義」の結びつき

ここで注目すべきなのが、団地の再開発と、先の「多人種主義」との結びつきである。かつて 1980 年代半ばまでの団地開発では、エスニシティはむしろ否定すべき対象とされ、無機質なエスニック色のない団地が建てられた。これに対して、1980 年代半ば以降の団地開発や団地再開発では、CMIO 別の多様性が強調されているのである。

#### 3.1 1980 年代半ばまでの団地開発によって建てられた、無機質なエスニック色を否定した団地の例

地区名	CMIO 別	団地名	時期	特色
格蘭セライ	「マレー人」地区	格蘭セライ団地の開発	1962 年開始	マレー色の否定
チャイナタウン	「華人」地区	チャイナタウンコンプレックス、ホンリムパークの開発	1970 年代～ 1980 年代前半	華人色の否定
リトルインディア	「インド人」地区	ジュージャオセンターの開発	1981 年完成	インド色の否定

1980 年代前半まで、上の三地区に CMIO 別の名を着せて、そこにエスニック色のない団地を開発したのである。団地化以前に住民どうしが築いたつながりが、「エスニシティ」の名の下に否定されたのだ。

#### 3.2 HDB 年報に見る、CMIO の強化

かつて人種・CMIO が無視すべき対象であったことは、HDB の年報を見ても明らかで、1966 年を最後に、CMIO や人種に関する言及が途絶えていた。

それが、1976 年になって「人種」という言葉が再登場するようになった。RC (住民委員会) スキーム設立の目的に、「スポーツ、社会、文化活動などを通して、住民の近隣意識や人種調和を促進する」ことが挙げられたのである (HDB1976: 8)。団地供給が一段落したところで、多様性の演出と団地住民の精神的管理が始められるようになったと言える。続いて 1977 年には、HDB がモスク (イスラム寺院) の建設を始めた。1979 年には、「ニースン」を「イーシュン」とするなど、地名の由来を無視して華語方言の地名を北京語 (マンダリン) に読みかえる、地名のマンダリン化が始まった。

1980 年には、以下のように、団地開発のデザインの CMIO 化が始まった。

「タウンセンターと近隣センターは、各街の個性を創造する機会を提供する。それゆえ、各センターには、特徴となる性格を与える。例えば、ジュロン東近隣区の 4 つのセンターは、チャイニーズガーデンに近いので、中国の建築の影響を受けたデザインをした。」 (HDB1980: 32)

「ジャランユーノス/チャンギロードのモスクは、伝統的なマレー建築プランでデザインした。同様に、都心のクレタアヤ [チャイナタウン] オフィスコンプレックスは、クレタアヤ地域の既存の街の光景と調和するように、屋根に中国風の建築テーマをもたせた」 (HDB1983: 43)。

「ベドック貯水池 [団地] の近隣センターは、伝統的な「チャイナタウン」の住居の特徴を取り入れて

いる」(HDB1984: 7)。

「ビシャン公園は、中国風にパタン化した。いくつかの公園では、風景のテーマも導入した。ウランの近隣公園の一つでは、中国風のパゴダとマレーのデザインのシェルターを建て、シンガポールの多元文化社会における様々な文化を反映させた」(HDB1987: 44, 46)。

「当局は引き続き、様々な大きさの公園を供し続けた。シェルターや売店などの公園の施設は、各公園のアイデンティティを反映するようデザインした。例えば、チョアチュカン近隣公園のインド風のテーマ、タンピネス近隣公園のインド風、マレー風、中国風のコンビネーションである」(HDB1988: 40)。

「個性の創造」や多様性の演出に、CMIO 別のエスニシティが用いられるようになったのである。しかし、例えばベドック貯水池団地では、なぜそこに「チャイナタウン」なのか、根拠が全くない。このように、CMIO が安直にワンパタン化して利用されていったのだ。とくにここで注目するのが、団地再開発との結びつきである。

### 3.3 団地再開発と多元主義の結びつきの例

#### (1) テンプル団地

植民地時代の 1954 年に HDB の前身の SIT によって建設されたテンプル団地は、シンガポールでは珍しい 4～5 階建てという個性的な低層ブロックから成り立っていた。それが、1980 年代に取り壊され、1987 年にその跡地に新たな団地が完成した。

このテンプル団地の再開発について、HDB 年報には、次のように記されている。

「テンプル団地では、建物の欄干、屋根の水タンク、リフトの壁に、この団地に位置する中国寺院のデザインから取ったモチーフを施した」(HDB1987: 39)。

「パビリオン（東屋）は、熱帯気候での日よけを提供し、住民間の統合を促進する。テンプル団地、タンピネスニュータウン、パシリスニュータウンのこれらパビリオンの建築上のデザインには、中国風・マレー風・インド風の影響が見られる」(HDB1989: 23)。

デザインの「中国・華人」化、CMIO 化である。デザインの多様性を演出する小道具として、CMIO 別のエスニシティが用いられる。多様性のワンパタン化とも言える。しかし、その陰で、都心近くのテンプル団地で長い間平和に暮らしていた住民が追い出されている。SIT によって建てられた個性的な低層団地と、その隣に HDB が建設したトアパヨニュータウンの高層大型団地とのコントラストが醸し出す、歴史の積み重ねによって創り出された多様性は、消却される。1954 年以降住民によって築かれてきた連続性が、取り壊され、その取り壊しと多元主義が結びつくのである。

#### (2) タマンジュロン団地

シンガポール西部のジュロン工業団地は、1960 年代以降大規模な開発が進められたシンガポール最大の工業地帯で、独立後間もないシンガポールの命運を握る重要な役割を果たしてきた。そこで働く労働者のために 1960 年代以降開発が進められたのが、タマンジュロン団地である。1976 年までにタマンジュロン団地に建設された 145 棟の団地のうち、現在残るのは、16%にあたる 23 棟のみだ。1980 年代末より始まったこの再開発に際して、HDB 年報では、次のように記されている。

「HDB は... シンガポールの豊かなエスニック・ミックスを土着の建築表現で表わしていく研究を、引き続き行っている... マレー人カンボン（村落）の建築の影響がここで目立っている。他とは区別してデザインしたブロックが、タマンジュロンのような古い団地の若返りを助ける」(HDB1989: 23, 25)。

ジュロン工業団地とともに歩んだタマンジュロンの歴史・個性を破壊し、その破壊に、先のテンプル団

地知と同様、CMIO 別のエスニシティが利用されているのである。しかし建てられたのは、1980 年代末にシンガポール中に建てられた、画一的な型だ。

### (3) その他

最近チャイナタウンの団地をきれいにした際、新たに中国風の門とパビリオンが付け加えられた。かつてエスニック地域に建てられた無機質なエスニック色のない団地を、多人種主義の下で「華人化・中国化」する試みだと言えよう。

同様に、「マレー人地区」とされたゲランセライ団地の隣には、マレービレッジが建設された。エスニック色のない左側のゲランセライ団地とマレービレッジのコントラストが興味深い。ゲランセライ団地の市場が大賑わいなものに対して、マレービレッジはいつも閑散としている。

### 3.4 団地の転売におけるエスニシティ別割り当て制度の導入

1989 年 3 月 1 日より、団地の売却においてエスニシティ別割り当て制度が導入されたのが、団地再開の強化と時期をほぼ同じくしたのは、偶然ではない。

人種別割り当て制度の導入の目的について、HDB は次のように説明した。

「人種調和を促進するという国家目標に沿って、エスニック統合政策を導入した。各近隣区でバランスの取れた人種混合を促進するのが目的である。」

「HDB 団地にバランスの取れた人種混合をもたらす政策を、1989 年 3 月 1 日に導入した。この政策の目的は、人種に関する寛容性 (racial tolerance) と人種調和を促進することである。新規フラットの割り当てと、公開市場でのフラットの購入・売却との両方に適用する。この政策の下、各近隣区と各ブロックに、次のような各エスニック集団の割合の上限を設定する」(HDB1988: 11, 67)。

エスニック集団	近隣区	ブロック
マレー人	22%	25%
華人	84%	87%
インド人及びその他マイノリティ	10%	13%

人種混合や人種調和の促進が目的に掲げられているが、実際には、団地住民に CMIO 別のラベルを常時張り付け、団地住民を CMIO 別に再分断する、CMIO 別強化の政策にほかならない。

例えば、人種別割り当てを導入しなければならないという根拠に、人種別の集住が進むことが挙げられ、人種別の集住が進んだ「問題団地」として、先のタマンジュロン団地が上げられた。タマンジュロン団地は、マレー人が多いというのである。

タマンジュロン団地にマレー人が多いことが問題とされると同時に、建築のマレー化が進められたのだ。このことは、人種別割り当て制の導入の真の目的が、実はマレー化を始めとする CMIO 化にほかならないことを示す。

## 4. 「多人種主義」による分断を乗り越えるか団地住民——むすびにかえて

以上述べてきたような多人種主義の強化と団地再開の関係について、よく言われるのが、次のような捉え方だ。すなわち、団地再開は、不可避免的に進行する CMIO 化をくい止め、住民の人種間のつながりを高めていると言うのである。しかし、私はこうした捉え方にくみしない。これに対して、私は、以下のような捉え方をする。

従来の連続性を「人種」「エスニシティ」の名の下に否定された住民が、団地開発の過程で、エスニシティを超えた連続性を築き始めた途端、今度はその連続性が、団地再開において、「多人種主義」

の名による CMIO 別の人種・エスニック文化の強調によって脅かされているのである。

こうした、エスニシティを指標としてネーションを絶えず分断しようという政府の「多人種主義」の試みに対して、団地住民が団地生活を根拠に自ら紡ぎだす連続性に私は注目し、現在その連続性を紡ぎだすべく住民の声を拾い集めている最中である。

私が紡ぎだそうとしているのは、団地再開発によって再分断の窮地に追い込まれた人々が、その状況において逆に団結する様だ。団地再開発によって逆に生まれる住民たちの共同性の萌芽とも言えよう。団地でのルーチンな日々が突然団地再開発によって奪われることで、このルーチンな日々の重要性に住民たちは気づき、例えば「プリンセス団地アイデンティティ」のようなものが、政府の意図しない形で生まれているのではないか。

このように、多人種主義と結びついた団地再開発による CMIO 別の分断を、団地再開発の影響を受けた住民が自ら連続性を築くことによって乗り越えていくことに、私は期待している。現在、この期待を実証することに全力を挙げているところだ。

これが実証できれば、多文化主義によるエスニシティの固定化を乗り越えるという点で、多文化主義をさらに進める上で何かしらのヒントを与えるだろう。

## 謝辞

本稿は、2001年5月27日に桃山学院大学で開催された関西社会学会で発表した内容を修正加筆したものです。

1999年7月から2001年6月にかけて、2年にもわたり私の留学・研究を助成していただき、ありがとうございました。今後論文という形で研究成果を発表し、その成果を多くの人と共有し社会に還元していくことで、助成していただいたことに報いていこうと思います。

2001年8月23日 鍋倉 聰